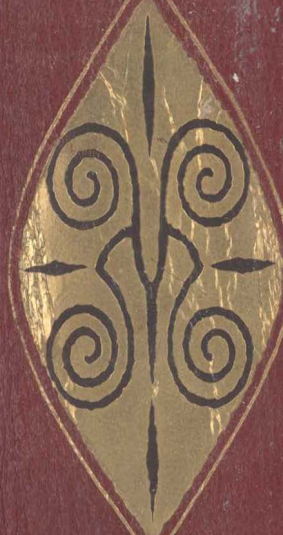
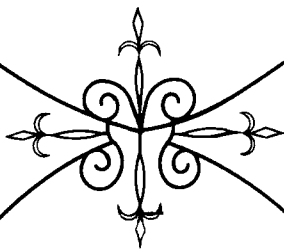


三島由紀夫
全集



三島由紀夫全集



26

評 論

Ⅱ

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第二十六卷

昭和五十七年六月二十日印刷

昭和五十年六月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

三島由紀夫



発行所株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話業務部(〇三)二六六一五一一 編集部二六六一五四一一

定価二五〇〇円

第二十六回配本(全35巻・補巻1)

Copyright © 1975 YŌKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第二十六卷 目次

アポロの杯	九
本塔婆小町覺書	一〇
武田泰淳の「風媒花」について	一〇
肉體の惡魔	一五
最高の偽善者として——皇太子殿下へ の手紙	一五
「新人特集」の皮相な新しがり	一七
矢代君と「狐憑」	一五
私の好きな作中人物——希臘から現代 までの中に	一六
死せる若き天才ラディゲの文學と映畫	一六
「肉體の惡魔」に對する私の觀察	一六
ノラ・ケイの公演をみて	一六
良ちゃん ロミオとジュリエット	一七
無題（「壇浦兜軍記阿古屋琴責の段」に ついて）	一七
舟橋聖一の「木石・鷲毛」について	一七

蝮——猿——人間	一七
藝術ばやり——風俗時評	一八
思ひ出の歌	一八
福田恆存——今日の人	一八
歌右衛門丈へ	一八
洋服オンチ	一七
經と緯	一八
愉しき御航海を——皇太子殿下へ	一八
日本の株價——通じる日本語	一八
心ゆるする思ひ出——「銀座復興」とメド ラノ曲馬	一九
南の果ての都へ	二〇
「女性に關する十五章」——奇抜な結論	二〇
藏相就任の想ひ出——ボクは大藏大臣	二〇
ジャン・コクトオと映畫	二一
レイモン・ラディゲ	二五
あとがき（「夜の向日葵」）	二八

福田恆存	三〇	私の洋畫經歷	三〇七
海風の吹きめぐる劇場	三三	死の分量	三四
伊東靜雄	三六	道徳と孤獨	三八
蠟燭の灯——今月の表紙に因んで	三三	「ラディゲ全集」について	三三
映畫「雙頭の鷲」について	三三	疾走するイメーヂ——世界一アイスシ	三五
作者の言葉（「戀の都」）	三六	ウに寄せて	三五
伊東靜雄氏を悼む	三九	「恥」	三七
伊東靜雄のこと	三四	フロイト「藝術論」	三〇
芝居の恐怖	三五	「室町反魂香」について	三二
「泥棒日記」——ジュネ作	三七	折口信夫	三四
あとがき（「三島由紀夫作品集」1と6）	三九	私のペンネーム	三六
現代青年の矛盾を反映——保安大學	三六	「地上より永遠に」評	三七
日本人の乞食根性——文士の洋行是非	三六	竹本劇「地獄變」	三〇
ジャン・ジュネ	三六	澁谷——暮の東京	三三
女 優	三九	卑俗な文體について	三六
堂々めぐりの放浪	三〇	芝居と私	三五
宮崎清隆「憲兵」「續憲兵」	三四	好きな芝居、好きな役者——歌舞伎と	

私	……………	三二五	ワットオの《シテエルへの船出》	……………	三九〇
フランス病第三期	……………	三六〇	「夜半樂」——中村眞一郎著	……………	四〇三
作品を忘れないで……人生の教師では	……………	三六三	「草の花」——福永武彦著	……………	四〇五
ない私——讀者へのてがみ	……………	三六三	荒唐無稽	……………	四〇八
男といふものは	……………	三六四	女ぎらひの辯	……………	四二一
退屈な新年——新春雜記	……………	三六八	好きな女性	……………	四二八
岸田國士先生	……………	三七〇	「浮氣は巴里で」	……………	四二四
アンリエットの巴里祭	……………	三七三	鳥に託した女性の哀歡——ノラ・ケイ	……………	四二九
ギリシア古劇の風味——俳優座「女の	……………	三七四	の「白鳥の湖」	……………	四三九
平和」評	……………	三七四	大谷崎	……………	四三一
モラルの感覺	……………	三七六	藝術時評	……………	四三四
馬——わが動物記	……………	三七九	僕の「地獄變」	……………	四三七
武田泰淳氏の文學	……………	三八一	映畫の中の思春期	……………	四三九
お洒落は面倒くさいが——私のおしゃ	……………	三八四	私の小説の方法	……………	四四三
れ談義	……………	三八四	新ファッシズム論	……………	四五六
眞面目くさつた祝辭	……………	三八六	私の顔	……………	四六六
「志賀直哉論」——中村光夫著	……………	三八八	毒々しいカバーで——私の處女出版	……………	四六八

まへがき(創作代表選集14)	四六	「熊野」について	五三
學生の分際で小説を書いたの記	四七	横光利一と川端康成	五五
「潮騒」ロケ随行記	四七	あとがき(「青春をどう生きるか」)	五六
「鱒賣戀曳綱」について	四六	フェティシズム——作者の言葉	五六
「若人よ蘇れ」について	四九	解説(福田恆存著「龍を撫でた男」)	五九
解説(川端康成著「舞姫」)	四三	危険な關係	五四
「ボクシング」について	四九	わが衣食住	五四
あとがき(「若人よ蘇れ」)	五〇	神島の思ひ出	五二
「沈める瀧」について	四四	川端康成ベスト・スリー——「山の音」	五二
アメリカ映画ノオト	五六	「反橋連作」「禽獸」	五四
芥川龍之介について	五二	田中千禾夫氏の戯曲「教育・笛」	五七
受賞について(新潮社文學賞「潮騒」)	五四	花鳥とは何ぞ	五九
「異境」を推す(同人雜誌賞選後評)	五五	「遠い聲遠い部屋」——アメリカ的デ	五九
田中千禾夫氏の二つの一幕物	五六	カダンス	五六
「鱒賣戀曳綱」について	五八	長島さんのこと——あるひは現代アマ	五九
私の十代	五〇	ゾン頌	五九
匿名批評是非	五二	「ランボオ論」——文明的錯雜そのもの	五七

現代にスネる——「肉體の冠」を見て	……	五九
解題	……	五七
校訂	……	五六

三島由紀夫全集 第二十六卷 評論 (2)

アポロの杯

航海日記

十二月二十五日

手續と仕事の疲勞。あわただしい出帆。少量の風邪。クリスマス・ディナー。サンタクロースから贈物をもらつて、クリスマス・カロールをうたふ子供らしいパーティー。就寢。(船の名はブレジデント・ウィルスン、船室は一八二號室)

十二月二十六日

隣室の日本人の友人二人は船酔で起きて來ない。一人で朝食をとる。今朝はやゝ時化である。千夜一夜物語の筆法によると、この船の生活は一行に盡きる筈である。

「それから私たちは、十四日の航海を経て、バグダッドに着きました」

それはバグダッドでも、われわれのやうに桑港でも、變りはない。船客としての航海日記はほとんど意味がない。ここには行爲が缺けてゐるから、書く價値がないのである。

船客の生活といふものは抽象的なものだ。プロムネイド・デッキを初老の夫妻が、腕を組んで、

衛兵のやうに規則正しく行つたり來たりしてゐる。私はデッキ・チェアに寝ころんで、この單調な動物の運動を見物してゐる。少くとも四ヶ月、私は仕事をしないでもいい。仕事をしてゐない時のかういふ完全な休息には、太陽の下に眞裸で出てゆくやうな、或る充實した羞恥がある。

船客たちの抽象的な生活、それは必ずしも純粹な精神生活の保障とならない。目の前の單調な散歩がその一つの證左であるが、精神生活と肉體生活が殆ど同様の意味をしかもたないやうなさういふ抽象的な生活なのである。精神生活が潑刺としてゐるためには、肉體がもつと具體的なものになつてゐなければならぬ。ところがここでは具體的なものに、たとへば海といふ自然に肉體がつながる場所としては、たゞあの船酔といふ場所を措いてはないのである。

一方「船客立入るべからず」の札の彼方では、具體的な躍動する生活がたえず緊張して動いてゐる。それは海といふ自然を指し示し、いつもその自然の機密を人間に密告してゐるリーダーや羅針盤をめぐる生活、さらにまた船が發明されて以來傳承されてゐる繩をたぐつたり、機關を操作したりする肉體的な力のいとなむ生活なのである。

かうした具體的な生活の營まれる場面の更に彼方から、航海のあひだ、自然はなほ、鐵壁をとほして船客たちの抽象的な生活に影を投じて來る。それが船酔なのである。

單なる船酔を、思考と思ひちがへてゐる知識人がいかに多いことであらう。

*

「君は太平洋を泳いで横斷できるか？」と案内書に書いてある。つゞけて「わけはない。毎日日本船の施設完備のプールで泳ぎたまへ」

*

私たちの食卓のボオイは氣さくな老人だ。彼はいつも口のなかで歌ひながら料理を運んで来る。「コーンド・ビーフ、ツウ」……「グリーイン・ティーイ」——時には、紅茶の袋をポットに入れるのを忘れてお湯のまま持つてくる。「チョッ、チョッ、チョッ、チョッ、アイム・ソーリー・アイヴ・フォーオーゴットン」

この年とつた鸚鵡は料理の名なら大抵知つてゐる。それから澤庵トクサンと梅干ウメボシまで。

十二月二十七日

きのふにまさる時化である。日は暗く、時として雲ごしに現はれて、暗澹たる光を投じる。海は昨日も今日も黒い。船尾と、彼方の波が碎ける眞際に、丁度硝子の切目に見られるやうな碧玉色が鮮やかに現はれる。それだけである。私は船室へ眼鏡を忘れて来た。今プロムネイド・デッキの窓際をかすめた鳥が、鷗だつたか、それともポオドレエルが自嘲の詩篇「信天翁」だつたか、見定めることができない。……船の中では税がかからないといふので、今日私はカフスタンを買つた。ああ、愚劣な買物。

きのふも今日も、木下李太郎氏が紀行の中で、「味のない煙草」と罵つてゐるベルメルを買つてのんだ。「味のない煙草」を喫して、胃をいたはるためである。

木下李太郎氏の紀行は、K氏の貸與によるものである。文章は甚だ美しい。殊に眺めるに美しい。

その「寂しい旅」の心境が、私の心境とあまりに隔つてゐることに愕いた。ゆくりなくもモンテニユが「隨想録」中の「悲しみについて」の章で、「この悲しみといふ情緒は私とは縁遠い

ものである」と書いてゐる冒頭の數行を、對蹠的に思ひ起した。

「智慧の悲しみ」は十九世紀人に流行したダンディスムである。ヴァレリーは地中海的晴朗のうちへこれを脱出し、ワイルドはメナルク式の哄笑のうちへ、ジイドは欲望のうちへ、これを脱出して赴いた。今世紀の文學者はほとんどダンディスムを持つてゐない。藝術家が市民的な、できれば銀行家のやうな装ひをすべきことを説いたのはマンである。

ポオドレエルは不感不動を以てダンディーの定義をした。感じやすさ、感じすぎることを、これはすべてダンディーの反對である。私は久しく自分の内部の感受性に悩んでゐた。私は何度かこの感受性といふ病氣を治さうと試みた。それには二つの方法がある。濫費して使ひ果たすこと。もう一つは出來うる限り儉約すること。私はこの二つの方法にかはるがはる據つた。一見反對の效用をもちながら、併用することによつて効果を倍加する藥品があるものである。

感じやすさといふものには、或る卑しきがある。多くの感じやすさは、自分が他人に感じるほどのことを、他人は自分に感じないといふ認識で輕慮する。子供のころ私は父や母が、人前で私の恥かしいことを平氣で話すのをきいて、絶望した。しかしやがて世間の人がさほど思つてゐないことを識るにおよんで安心した。

世間の人はわれ／＼の内親の死を毫も悲しまない。少くともわれわれの悲しむやうには悲しまない。われわれの痛みはそれがどんなに激しくても、われわれの内體の範圍を出ない。

感じやすさのもつてゐる卑しきは、われわれに對する他人の感情に、物乞ひをする卑しさである。自分と同じ程度の感じやすさを他人の内に想像し、想像することによつて期待する卑しさである。感じやすさは往々人をシャルラタンにする。シャルラタニスムは往々感じやすさの企てた

復讐である。

私はまづ自分の文體から感じやすい部分を驅逐しようと試みた。感受性に腐蝕された部分を剪除した。ついで私の生活に感じやすさから加へられてゐるさまざまの剩餘物、こつてりとかけられたホワイト・ソースの如きものを取り去らうと試みた。私の理想とした徳は剛毅であつた。それ以外の徳は私には價値のないものに思はれた。

午食のとき、卓がかしいで、皿もコップも片方へこつてしまふ。すこし遠いところにあるコップを支へようとして、椅子を乗り出すと、椅子がこり出して、私はこりながら落ちさうになつた。「どこへ行くんですか」

とボオイが笑ひながらきく。

私が答へる。

「サンフランシスコへ」

十二月二十八日

はじめての晴天。海は穏やかである。船長以下白服に着かへる。

亭午、船は北緯三十度二分、東經百六十三度十三分に在る。横濱を隔ること千二百六十マイルである。

テネシーのカレッヂを経てハーバード大學へ留學する坂庭君と、二世の木村君と三人で *Shut-the-board* と云ふデッキ・スポーツをする。興の乗るあまり、救命具をつけて集まる船客待避演

習におくれる。

日没ちかくまで露天の椅子にゐた。四圍に陸影を見ない。

今日すでに私は怠惰に慣れてゐる。かういふ私を見るのが私は大きらひだ。

太陽！ 太陽！ 完全な太陽！

私たちは夜中に仕事をする習慣をもつてゐるので、太陽に對してほとんど飢渴と云つていい欲望をもつてゐる。終日、日光を浴びてゐることの自由、仕事や來客に煩はされずに一日を日光の中にゐる自由、自分のくつきりした影を終日わが傍らに侍らせる自由、この一日サン・デッキにゐて、忽ちにして私の顔は日灼けした。

今日の快晴と平穩とは、昨夜おそく甲板に出て、かすかにゆれてゐる檣上の灯や、頭上のオリオンを仰いだとき、すでに豫期されたものである。陸の影も、船の影も、雲の影もまたない巨大なフラスコの内部のやうな海。このすばらしさは、これから見るとどんな未知の國のすばらしさを凌駕してゐるやうに思はれる。かういふ時にわれわれは、えてしていちばん下らないことを思ひ出す。「ワイルドの回想」の一頁に、ジイドがかう書いてゐる。「太陽を崇拜すること、ああ、それは生活を崇拜することであつた」

今日はじめてプールに海水が湛へられた。外人の父子が嬉々として泳いでゐる。私も少し泳いだ。水はまだ甚だ冷たい。水の中にゐたのはわづかの間である。

私は今日、日没を見なかつた。一日、太陽の面差に見惚れてゐたので、その老いの化粧を見ようとは思はなかつた。ポルト・リッシュの「昔の男」に出てくる感じやすい少年オーギュスタンは、日没にばかり興味をもつことで、その両親の心配の種子をつくる。私もまた日没以外に太陽